

チームごっくんニュースレター

認知症



認知症による嚥下障害とは？

認知症は、脳の働きが低下することで「もの忘れ」などが起こる病気です。認知症になると、記憶力や考える力だけでなく、**食べ物を上手に飲み込む力も弱くなる**ことがあります。

認知症の3つのタイプ

アルツハイマー型認知症：一番多くみられるタイプです。最初は「人の名前が出ない」「物を置き忘れる」といったもの忘れから始まります。

レビー小体型認知症：頭がはっきりする時とボーッとする時の差が激しく、**実際にはない人や動物が見える「幻視」**や、**体が硬く動きにくくなる（パーキンソン症状）**が出やすいのが特徴です。

前頭側頭型認知症：初期はもの忘れよりも、**性格が急に変わる**のが特徴です。周りを気にせず我が道を行くような行動をとったり、同じ言葉や行動を繰り返したりすることがあります。

具体的な嚥下障害

認知症が進むと、飲み込みにも次のような変化が現れやすくなります。**口の中で食べ物をモグモグする時間が長くなり、飲み込むまでに時間がかかる。「ゴックン」と飲み込むのどの反射（合図）が遅れる。飲み込んだ後も、のどに食べ物が残りやすくなる。**認知症の症状が進むにつれて、こうした飲み込みの障害も重くなっていく傾向があります。

診断と検査

認知症の診断には、脳の縮み具合や血流を調べるために「MRI」などの頭の画像検査を行います。また、飲み込みの状態を調べるためには、レントゲン検査（嚥下造影検査）や内視鏡検査（嚥下内視鏡検査）を行い、食べ物が口からのどへどのように進んでいるか、のどに食べ物が残っていないかを詳しく確認します。

治療について

現在、飲み込みの障害そのものを直接よくする「特効薬」はありません。そのため、次のような治療を行います。

お薬による治療：認知症の進行をゆっくりにするお薬を使います。落ち着きがないなどの症状には、それを和らげるお薬を使うこともあります。

生活面での工夫：飲み込みの障害に対しては、今の状態に合わせて無理なく食事を楽しめるような工夫（対症療法）を行っていきます。

認知症は「もの忘れ」だけでなく、毎日の「食べる力」にも影響を与えます。対応として「**食べ方・姿勢・食べ物の工夫**」が中心です。水分でむせる場合はとろみ剤を加えたり、頭の位置を前に傾けたりして誤嚥を防ぎます。食べ物の味や食感を工夫することで、口の動きが活発になることもあります。たとえば、味が薄いものだと口に入れたまま止まってしまうのに、パリッとした食感のあるものはスムーズに食べられることもあります。